

---

# 生物災害 警察署からの大脱走劇

霞乃 疾風

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

生物災害 警察署からの大脱走劇

### 【Nコード】

N1711Z

### 【作者名】

霞乃 疾風

### 【あらすじ】

警察署が避難所で安全だと思っていた少年が警察署が安全ではなくなった時、その危険な警察署から仲間と共に脱出するまでの道のりを描いたもの

## プロローグ？（前書き）

これは私

作者の処女作です

まだまだ未熟者ですが、宜しく願います

## ブローグ？

その日……

俺の街からは“人間”と呼べるような生存していると 呼べるような人間は見なくなった。

俺の名は永井零士一（ナガイ・レイジ）

この世界なら何処にでも居る……

訂正、何処にでも居ないけど居る

割とまあ普通の学生だ。

今日も日常通り

学校へ行き、勉強をして、家に帰り、寝る

そのパターンで一日が終わる

明日、またそのパターンが来るはずだったが…

その明日という日常パターンは来ず、非日常と言うパターンが来たのであった

## ブログ？（後書き）

こんな感じで良いのかな？  
凄く不安が残っています…

うん、一番安全そうな 警察署に突撃だー！！（前書き）

取りあえず、本編投下…

誤字がないか不安…

うん、一番安全そうな 警察署に突撃だー！！

その日、俺の街には

普通の生存と呼べるような人間は居なくなつた。

零士「くそつたれ！ どうなっているんだよ この街はー！！」

俺の名は零士

何処にでも居たはずの普通の学生さ

俺は今、鉈とネイルハンマー×6本と日本刀を装備して  
とある建物へ全力逃亡をしている

その場所とは、警察署！

避難所といったら此処！！ よくゲームなどで  
ショットガンやら弾薬が沢山ある場所！

ちなみに…家の近くの銃砲店の中に入ってみたが

ガラスケースは破壊されて武器弾薬は全て持ち出された後だった。

え？何処で、鉈とネイルハンマーを手に入れたかつて？

そりゃ……勿論………俺の武器k…ホームセンターですよ。

日本刀の方は 家の床板を外したら出てきました。

これが、なんと切れ味抜群！

へこれでもか！？と言うぐらいに

家の中に不法侵入したゾンビ共を切り捨てて殺りましたよ。 ええ…

そのことは、置いていておいて

何とか無事に 警察署に到着！！

うはっ！ 警察署の入口門付近にゾンビの群れを発見した。

どうやら入口門から、

警察署内に入ることは無理そうなので（チェーンなどが巻き付いているし）

助走を付けて警察署の柵を飛び越える事にした  
柵の高さは2m70cmだろうか？

だが、テンションがいつも以上にハイな俺には関係なかった。

他のゾンビに気づかれないように

慎重に下がり、呼吸を整えて

柵に向かって勢い良く走り出した。

「うゝあー……………」

「ちつ……………！ 邪魔だ退け！！」

俺の行動に気づいたのかゾンビの一人が  
入口門の破壊を放棄して

進行の邪魔をしてきたが、関係ない

俺は そのゾンビを踏み台にして柵に向かって  
大きく飛んだ。

踏んだ瞬間 グシャ！！ と言うネギを折る嫌な音が聞こえたが  
無視をして何とか柵を乗り越えた。

「うわっ……………最悪…腐敗した頭皮が靴の裏に着いた…」

ふと、嫌な音を出したゾンビの方を見ると

あらら……………首が90度ボツキリ折れて倒れている

ビクビクと無駄に痙攣していて

“無駄に” 気味が悪かった。

正直、これは生きた人間の頭をカチ割った直後の痙攣並みに  
気味が悪い。

俺はそんな死体を見ながら



二、三回 ブルブルツ…と肩を震わせた。

「おお、怖い 怖い……さて、中に入ろつかのう……」

必死に入口門の施錠を破壊しようとする

ゾンビ共を尻目に ボソリと呟き警察署内に俺は入っていった。

善良な逃げてきた一般市民なのに……ヤメテ！ そんな疑いの目で俺を見ないで

## 2 話目 投下

善良な逃げてきた一般市民なのに……ヤメテ！ そんな疑いの目で俺を見ないで

新人A「動くな。」

新人B「……………言葉が分かるなら、武器を全て捨て 手を上げる。」

エントランスに入ると いきなり俺に向かって

二つの拳銃が突きつけられた。

二人とも 特有の青い服を着ていることから

警察官と言ったことが分かった。

発砲など生身の人間からしてみても、たまったものではないので  
ゆっくりと 腰に差してあった日本刀、ネイルハンマー、鉈を

地面に置き 手を上に上げた

だが、二人の警察官は俺から銃口を外すことはなかった

「おい、只の俺は一般市民だぜ？ 外の怪物共とは違う」

ぶつちやけ……日本刀を装備している時点で

只の一般市民では、無いのだが……

「……外の全ての入口は頑丈に施錠したはずだ！」

「何処から お前は入ってきた？」

何か回答として歯車が噛み合っていない様な

気がするが……此処でツツコミを入れてしまうと話が

前に進まなくなってしまうので、左側の警察の質問に答えることに  
した。

「えっと……入口門近くの柵を飛び越えてきました。」

『飛び越えてきた！？』

二人の警察官が同時に同じことを馬鹿みたいな大きな声で聞き返してきた。

御陰で、奥の方に居る

避難してきた一般市民全員も

俺の存在に気がついたようであつた

「え、ええ……助走を付けて、

外の怪物の頭を踏み台にして飛び越えました……」

「2m70cmの柵を？……信じがたいな。」

「残念だが、私達は君の言っている事に関して信用できない。  
市民の安全を第一に君を此処で拘束する。」

「ちょ……」

俺は呆気なく二人の警察官に拘束された。

まあ拳銃を突きつけられて居るままなのだから仕方がない。まだ死にたくない者ですし……

俺は警察に引つ張れながら、警察職員オフィスに着いたその時だった

「お前等、なあくに やっているんだ？」

ふと、背後の通路から何処か聞きなれた別に懐かしくはないけど、懐かしいような声が聞こえた。

「……！」

「俺の弟に何か様か？コノ野郎。」

「虎影……。」

「虎影：“さん”を付けると言っているだろう！！新人A、B！」

バシッ！ バシッ！！

と、一発ずつ 俺の姉貴“虎影（トラカゲ）”はA、Bの頭をひっぱたいた

いつ見ても、姉貴の人を殴る音は痛そうだ。

「す、すみません…虎影さん」

「虎影さんの弟さんでしたか……すみません。」

「それで良い。で、早速だが零士の拘束を解け。」

「それは…流石に……」

「ああん？ もう一発、喰らいたいかな？」

「滅相も御座いません！！ どうぞご自由に！！」

流石は泣く子も黙る姉貴…言葉に容赦がねえ……

と言うよりも、何かもう二人を殴る準備に入っているし。

さらに、その二人は全力で姉貴から離れているし…

「よくここまで無事に来れたな、取りあえずコーヒーでも飲むかな？」

そう言う姉貴は、自分が飲みかけたのであろう

コーヒーを自分の前に置いてきた。

「あ、喉が乾いていないので結構です。」

「そうか？ コレ意外と美味しいのだが…」

そう言う姉貴はズズツと音を立てながら残っているコーヒーを飲み干した。

善良な逃げてきた一般市民なのに……ヤメテ！ そんな疑いの目で俺を見ないで

短い文章の癖に

書くの遅くてすみません…

次回分も時間が無いので

遅い投稿となります……

パシられる俺って…一体……

「で、コレ お前の装備な 返すから。」

「ありがと……姉貴、この街で何が起きているか分かる？」

装備を返してもらった俺は

警察官である姉貴に

今、街の中で起こっている事について聞いてみることにした。

「さあな。知らん…俺が気づいた頃には、この有様よ。」

「因みに気づいた時って、何時？」

「えっ？ いや……その……」

目が泳いでいる

……どうせ、ろくでもない時に やっと気づいたのだろう

例えば、勤務中に“彼女”とデートしていたか……

勤務中に友達のライブに参加していた時とか……

「……普通に、外のパトロールをしていたぞ。………本当だぞ!？」

「……嘘だろ。本当は？」

姉貴が『……本当だぞ!？』と最後に付けたときは

ほぼ嘘である。やはり、ロクでもないことをしていたようだ。

「……むう……。……このデスクで昼寝をしていました。」

俺は思った……この日まで よくクビにならなかったなと……

「はあああ……。」「

「そ、そんなに深い溜め息をつかなくても、いいじゃないか!」

俺は姉貴の行動に対して

こんなに深い溜息をしたのではない。

こんな部下を持ってしまった姉貴の上司に向かって  
哀れみを込めて溜息をしたのであった。

「あ、そ、そうだ!! ホールに俺の仲間が居るんだ。  
これを渡してやってくれ。」

そう言うと、姉貴はコートの内ポケットから  
ビンに入った液体3本を取り出すと俺に渡した。

「何コレ。」

「ホットドリンクだ。」

「...どうせ、またロクでもない薬品でしょ?」

「良いから、行ってこい。」

俺は追い出されるように警察職員オフィスを出ると  
巨大なホールの中から姉貴の友達を探しに出た。

案外、早く見つけることが出来た。

まあ見つけるというより、見つけられたのだが。

..... 毎回見るたびに思うのだが、

姉貴の友達会った時に体の傷が多くなって行くように見えた

「おう、零士 久しぶりだな。童貞は卒業できたか?」

彼女は確か笑うと歯が綺麗な猛虎さん... 実名は知らない。  
姉貴が、『猛虎、猛虎』としか呼んだことがないので皆、猛虎と



呼んでいる。

「いえ、まだです。」

「で？ お前がアタイ等を探していると言っことは、虎影から渡すように言われたんだらう？」

「その通りです。どうぞ。」

で、アタイ口調の人が白狼さん姉貴と昔からの悪友らしい……

本人 曰く白っぽい髪の色がチャームポイントらしい

「……………どうも。」

そして、このフードを被っていて必要なこと以外全くしゃべらない人、琥珀さんだ。

「なんだ…ホットドリンクかよ。」

「まあ、無いよりはマシだ。」

二人が姉貴の差し入れに対してコメントをしている時だった。琥珀さんが何かボソツと呟いた

「……………痒い。」

「へ？…今、何か言いました？」

「……………何も……。」

確かに今、

何かを呟いた気がしたんだけど……  
気のせいかな？

「ふう…美味かったぜと伝えてくれ。」

「同じく、温まったと言っておいてくれ。」

どうやら二人はホットドリンクを飲み終わったようだ  
中身はアルコールの様だ

二人の口からは、アルコールの香りが漂ってきた上に  
ほんのり顔が赤く染まっていた。

「分かりました。」

俺が軽く3人に礼をして  
立ち去ろうとしたときだった。

「………………。」「バリバリバリバリ

全身を一心不乱に掻き毟っている琥珀さんがそこに居た

パシられる俺って…一体……（後書き）

魔鬼 改 は、半分 式式に任せて  
私はコチラを少し書こうと思います

魔鬼で見たことのある名が ありますが  
平行世界として見てください

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1711z/>

---

生物災害      警察署からの大脱走劇

2011年12月30日22時45分発行